

肉専用種肥育経営

立地・土地条件：九州畑作地帯
 経営形態：家族・専業
 経営タイプ：肉専用種肥育経営

1 経営の特徴

- ① 肥育ステージ、個体能力に適切に対応した肥育管理技術の向上により生産コストの低減を図る経営
- ② 生産コスト低減のため、以下に配慮
 - ア 地域で入手可能な未利用・低利用飼料資源の活用
 - イ 肥育期間の短縮
- ③ 自給飼料生産は機械の共同利用などにより機械購入費、飼料生産労働時間を抑制
- ④ 家畜排せつ物については、たい肥化处理を行い、自己経営耕地のほか、主として地域の耕種農家との連携による経営外耕地に還元

2 技術の特徴

- ① 肥育ステージに応じた適正な飼養密度の確保、肥育ステージ及び牛群ごとの栄養管理等の飼養技術の向上による効率的な肥育管理。
- ② 増体の優れた肥育もと牛を導入することによる肥育期間の短縮化
- ③ 家畜排せつ物は、フロントローダによる畜舎からの搬出、たい肥化施設での発酵促進

【経営等の指標】

経営概況	①土地利用： 飼料作付延べ面積 2 ha ②肥育牛： 100頭 年間出荷頭数：70頭（肥育去勢牛） ③外部化： 飼養管理のヘルパー
飼養方式	牛房飼
牛	出荷月齢： 25ヶ月 出荷時体重： 700kg以上 肥育期間： 17ヶ月程度
土・草	イタリアライグラス、トウモロコシ 飼料自給率： 5% 粗飼料給与率： 15% たい肥利用方法：経営内1割、経営外9割
人	肥育牛1頭当たり生産コスト：274千円 （もと畜費を除く肥育去勢牛の生産費） （現状との比較）（78%） 経営体所得： 830万円 主たる従事者1人当たり所得：750万円 労働時間（年間） 総労働時間： 2,550時間 家族（主たる従事者数）： 1人、2,000時間 家族（補助的従事者数）： 1人、550時間 雇用労働者数： 0人、0時間 1頭当たり飼養労働時間： 23時間

肉専用種肥育一貫経営

立地・土地条件：九州畑作地帯
 経営形態：法人
 経営タイプ：肉専用種繁殖肥育一貫経営

1 経営の特徴

- ① 繁殖部門の導入により、肥育もと牛の安定的確保、もと牛導入費の抑制を図る一貫経営
- ② 肥育ステージ、個体能力に適切に対応した肥育管理技術の向上により生産コストの低減を図る経営
- ② 生産コスト低減のため、以下に配慮
 - ア 地域で入手可能な未利用・低利用飼料資源の活用
 - イ 肥育期間の短縮
- ③ 自給飼料生産はコントラクター利用などにより機械購入費、飼料生産労働時間を抑制
- ④ 家畜排せつ物については、たい肥化处理を行い、自己経営耕地のほか、主として地域の耕種農家との連携による経営外耕地に還元

2 技術の特徴

- ① 肥育ステージに応じた適正な飼養密度の確保、肥育ステージ及び牛群ごとの栄養管理等の飼養技術の向上による効率的な肥育管理
- ② 肥育もと牛の確保にあたっては、増体の優れた繁殖雌牛を導入し、外部導入牛についても増体の優れた肥育もと牛を導入することによる、肥育期間の短縮化
- ③ 家畜排せつ物は、フロントローダによる畜舎からの搬出、たい肥化施設での発酵促進

【経営等の指標】

経営概況	①土地利用： 飼料作付延べ面積12ha ②肥育牛：100頭 繁殖牛：50頭 年間出荷頭数：68頭（肥育牛去勢51、雌17頭） ③外部化： 飼養管理のヘルパー、自給飼料生産のコントラクター利用
飼養方式	牛房飼
牛	出荷月齢： 去勢25ヶ月、雌27ヶ月 出荷時体重：去勢700kg以上、雌654kg以上 肥育期間：去勢17ヶ月程度、雌19ヶ月程度
土・草	イタリアライグラス、トウモロコシ 飼料自給率： 20% 粗飼料給与率： 25% たい肥利用方法：経営内4割、経営外6割
人	肥育牛1頭当たり生産コスト：606千円 （自家産のもと牛と肥育去勢牛の生産費の合計） （現状との比較）（77%） 経営体所得： 1,070万円 主たる従事者1人当たり所得：880万円 労働時間（年間） 総労働時間： 3,760時間 家族（主たる従事者数）： 1人、2,000時間 家族（補助的従事者数）： 1人、1,200時間 雇用労働者数： 1人、560時間 1頭当たり飼養労働時間：子牛 37時間 肥育牛 22時間

乳用種育成経営

立地・土地条件：北海道牧草地帯
 経営形態：家族・専業
 経営タイプ：乳用種育成経営

1 経営の特徴

- ① 地域の立地条件を活かして規模を拡大するとともに、乳用種と交雑種の子牛育成の効率化と安定化を図る経営
- ② 育成ステージ、個体能力に適切に対応した育成管理技術の向上により生産コストの低減を図る経営
- ③ 生産コスト低減のため、以下に配慮
 - ア 地域で入手可能な未利用・低利用飼料資源の活用
 - イ 育成期間の短縮
- ④ 自給飼料生産は機械の共同利用などにより機械購入費、飼料生産労働時間を抑制
- ⑤ 家畜排せつ物については、たい肥化处理を行い、自己経営耕地のほか、主として地域の耕種農家との連携による経営外耕地に還元

2 技術の特徴

- ① 育成ステージに応じた適正な飼養密度の確保、育成ステージ及び牛群ごとの栄養管理等の飼養技術の向上による効率的な育成管理
- ② 酪農家との連携により初生牛管理（初乳給与等）に努め、疾病（下痢や肺炎等）予防による事故率低減の徹底
- ③ 育成後期の良質粗飼料の多給により、肥育農家のニーズに応じた良質な肥育もと牛を安定的供給
- ④ 家畜排せつ物は、フロントローダによる畜舎からの搬出、たい肥化施設での発酵促進

【経営等の指標】

経営概況	①土地利用： 飼料作付延べ面積 3.2 ha ②育成牛：500頭（乳用350、交雑150） 年間出荷頭数：1,034頭（乳用759、交雑275） ③外部化： 飼養管理のヘルパー
飼養方式	牛房飼
牛	出荷月齢：乳用種 6ヶ月、交雑種 7ヶ月 出荷時体重：乳用種270kg以上、交雑種250kg以上 育成期間：乳用種5.4ヶ月程度 交雑種6.4ヶ月程度
土・草	混播牧草、麦桿 飼料自給率： 20% 粗飼料給与率： 25% たい肥利用方法：経営内 7割、経営外 3割
人	育成牛1頭当たり生産コスト：乳用 6.1千円 交雑 5.5千円（ぬれ子費用を除く育成生産費） （現状との比較）（72%） 経営体所得： 1,060万円 主たる従事者1人当たり所得：880万円 労働時間（年間） 総労働時間： 6,080時間 家族（主たる従事者数）： 1人、2,000時間 家族（補助的従事者数）： 1人、1,200時間 雇用労働者数： 1人、2,880時間 1頭当たり飼養労働時間：育成牛 9時間

乳用種肥育経営

立地・土地条件：関東畑作地帯
 経営形態：家族・専業
 経営タイプ：乳用種肥育経営

1 経営の特徴

- ① 肥育ステージ、個体能力に適切に対応した肥育管理技術の向上により生産コストの低減を図る経営
- ② 生産コスト低減のため、以下に配慮
 - ア 地域で入手可能な未利用・低利用飼料資源の活用
 - イ 肥育期間の短縮
- ③ 自給飼料生産は機械の共同利用などにより機械購入費、飼料生産労働時間を抑制
- ④ 家畜排せつ物については、たい肥化处理を行い、自己経営耕地のほか、主として地域の耕種農家との連携による経営外耕地に還元

2 技術の特徴

- ① 肥育ステージに応じた適正な飼養密度の確保、肥育ステージ及び牛群ごとの栄養管理等の飼養技術の向上による効率的な肥育管理。
- ② 増体の優れた肥育もと牛を導入することによる肥育期間の短縮化
- ③ 家畜排せつ物は、フロントローダによる畜舎からの搬出、たい肥化施設での発酵促進

【経営等の指標】

経営概況	①土地利用： 飼料作付延べ面積 9 ha ②肥育牛：250頭（乳用150、交雑100） 年間出荷頭数：201頭（乳用127、交雑74） ③外部化： 飼養管理のヘルパー
飼養方式	牛房飼
牛	出荷月齢：乳用種 20ヶ月、交雑種 23ヶ月 出荷時体重：乳用種800kg以上、交雑種760kg以上 肥育期間：乳用種14ヶ月程度 交雑種16ヶ月程度
土・草	混播牧草 飼料自給率： 5% 粗飼料給与率： 10% たい肥利用方法：経営内2割、経営外8割
人	肥育牛1頭当たり生産コスト：乳用232千円 交雑236千円（もと牛費を除く肥育生産費） （現状との比較）（83%） 経営体所得： 1,080万円 主たる従事者1人当たり所得：930万円 労働時間（年間） 総労働時間： 2,920時間 家族（主たる従事者数）： 1人、2,000時間 家族（補助的従事者数）： 1人、920時間 雇用労働者数： 0人、0時間 1頭当たり飼養労働時間：肥育牛10時間

乳用種肥育一貫経営

立地・土地条件：北海道牧草地帯
 経営形態：法人
 経営タイプ：乳用種育成肥育一貫経営

1 経営の特徴

- ① 育成、肥育部門の一貫経営により、肥育もと牛の安定的育成、もと牛導入費の抑制を図る経営
- ② 育成・肥育ステージ、個体能力に適切に対応した肥育管理技術の向上により生産コストの低減を図る経営
- ③ 生産コスト低減のため、以下に配慮
 - ア 地域で入手可能な未利用・低利用飼料資源の活用
 - イ 育成・肥育期間の短縮
- ③ 自給飼料生産は機械の共同利用などにより機械購入費、飼料生産労働時間を抑制
- ④ 家畜排せつ物については、たい肥化处理を行い、自己経営耕地のほか、主として地域の耕種農家との連携による経営外耕地に還元

2 技術の特徴

- ① 育成・肥育ステージに応じた適正な飼養密度の確保、ステージ及び牛群ごとの栄養管理等の飼養技術の向上による効率的な肥育管理
- ② 肥育もと牛の育成にあたっては、酪農家との連携により初生牛管理（初乳給与等）に努め、疾病（下痢や肺炎等）予防による事故率低減の徹底を図り、育成期間を短縮化
- ③ 家畜排せつ物は、フロントローダによる畜舎からの搬出、たい肥化施設での発酵促進

【経営等の指標】

経営概況	①土地利用： 飼料作付延べ面積 20ha ②肥育牛： 400頭 育成牛： 160頭 年間出荷頭数： 338頭（乳用種肥育牛） ③外部化： 飼養管理のヘルパー
飼養方式	牛房飼
牛	出荷月齢： 乳用種 20ヶ月 出荷時体重： 乳用種 800kg以上 肥育期間： 乳用種 14ヶ月程度
土・草	混播牧草、麦稈 飼料自給率： 5% 粗飼料給与率： 10% たい肥利用方法： 経営内 2割、経営外 8割
人	肥育牛 1頭当たり生産コスト： 276千円 （ぬれ子費用を除く育成と乳用種肥育の生産費の合計）（現状との比較）（82%） 経営体所得： 900万円 主たる従事者 1人当たり所得： 710万円 労働時間（年間） 総労働時間： 4,570時間 家族（主たる従事者数）： 1人、2,000時間 家族（補助的従事者数）： 1人、1,200時間 雇用労働者数： 1人、1,370時間 1頭当たり飼養労働時間： 育成牛 9時間 肥育牛 6時間